

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	剣道部報
Author(s)	
Citation	龍南, 188: 84-88
Issue date	1923-12
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8681
Right	

サウ、ヨツパシホガマ等を見る。ズル／＼と砂の崩れる危険な崖路で冷汗をおとしながら、十一時半頃に着す。

(海拔八千三百尺)

槍が見ゆる。立山も見ゆる。そして嬉しい事には富士の秀峰がくつきり空に浮いてるぢやないか。槍ヶ岳の如何にも男性的な活動的なのに對して富岳は超然とすべてを覺り切つた聖人の様に聳立つ。

日本アルプスの大觀を窓にうつゝ、に第二回の晝食を食ふ。お茶の代りに雪溪の雪をさつて砂糖をかけて食べた。下界の氷屋での味はひさは又格別霧ならぬ雪を吸つて仙人の様な氣になり、うつゝりして居ると孫七が「そろ／＼下りやう」と促すので出掛けの事にする。雪溪を見下す。上の方三間ばかりは六十度位の傾斜をなして恰も掌を立てた様。

しばらくザラ石の上を降りる。雪溪の一を渡る時H君が滑る孫七が唳驚飛出して下からやつと受け止めた。皆ホッとして胸をなで下す。少し下つてから愈々雪溪下りとなる。「下り」でなくて「滑り」である。着莫塵を敷いて一寫千里の勢で滑走する。雪面が

氷つて固い突起があるので尻が痛い。併し夏の最中雪を飛ばして疾驅するの快は言語にあらはせない。岩があるを「ソレツ」とアツキスを雪に打込む。一度止るを又懲りもせず滑り出す。下に近づくを復傾斜が急になつて滑走が危険となる。

おづ／＼杖を頼りに降りる。ハツと思ふ間もなく踏みすべらして恐ろしい勢で下へ落ちる。孫七と勘一は一足先に下りて滑つた奴を受け止めるのに忙しい。他人の滑るのを笑つて居る最中に自分がふみ滑らす。約

一里の大雪溪を漸く下りて峠を見上げると噫々たる雪溪の頂には薄い霧がかゝつて早此の世のものから隔てられて居る。それから道は平凡な林道となつて三時頃大澤の小屋を通過、五里ばかり歩くとやつと田や畑が見ゆる所に来る。何だか珍らしい世界に來た様な氣分になる。「やあ家が見えた」から鶏が鳴いた」と、まるで山猿が始めて人里に出た様な調子である。一里と稱する長い／＼田圃道を辿つて大町の對山館に草鞋の紐を解いたのは正に午後六時半、連日の好天氣に痛快なりし山旅も遂に終つて、此處に再び下界の人となる。——終——

【九州新聞より轉載】

劍道部報

(大正十一年度)

委員 荒木 省吾

佐藤 潤一

今(大正十二年)筆をさつて見るに高踏的な過ぎし日に限りなき懷さと愛執をおぼへるあの美しい足跡を拙い文字で汚し去るのは勿体ない濟まない様な氣がする。そしてあの様な生活にふれることの出來た自分等の幸福さが思はれる。

九月(大正十年)になり熊本に歸つて來て久方ぶりで懷しかった部友の顔を見合はせた時只わけもなく涙が流れた。(來年こそ)

「やらう」若き面は又緊張し十四の生命は再び一團となつて燃え上つた。脉々として長く傳はる劍道部の意氣を胸の奥深く秘めては劍道部へ部友へさ再び燃えさかる感激の聖さに照されて我等十四は來夏遠征への壯途に第一歩を踏み出した。

一ケ年の間吾等の前に如何なる困難があろう。どんな支障があるかも知れない。而も太刀にまつける榮ある歴史を思へば吾等は完全なる合奏の下に打ち克ち打ち克ち倒る

ゝまで戦はう。如何なる苦にも堪へて最後の勝利に向ひ奮然として精進するのだ。かくて吾等剣道部の選手は心を合はせ力を共にして再び光榮の道辿り行く。

大正十一年一月になつて合宿を子飼の岡田整骨院跡に移し一同自炊を續けた。寒稽古は、一月十日より三週間毎朝六時より七時までに行はれた。夢あたゝかい床をけつて汗にた月につめたき霜を踏んで道場に通つた時の辛さ、然し此くして自分等が鍊へられ覇業の道を進み得るかと思へば却つて勇氣を益した。選手以外にも精勤者拾數名を出し一月廿日には無事納會を兼ねて來る三月卒業せらるゝ選手諸兄の豫餞會が行はれた此くして三月には長らく剣道部の爲につくし且吾等を熱心に指導激勵して下さつた敬愛する三年の岩崎、關、田中、林の四兄を送らればならなかつた。去る人は限りなき名残さ鞭撻を残したる吾々は新に意氣旺盛熱烈なる一年の石中君を加へて益々決意を固め奮闘を續けて行つた。學年試験を終るさ他の人達は楽しい故里へ歸つて行つた。然し吾々は櫻花をよそに合宿に籠つて苦しい練習を續けた。宮島、中島、佐藤、荒木

伊藤、石中であまり少いので警察の道場で毎日稽古あるのを幸に其所で腕を鍛へる事にした。幸署長の熱心なる應援と警察官諸彦の熱心なる参加によつて思ひ掛けない良い練習が出来たのは感謝に耐へない。そして休暇中西、土井兩先輩が熊本に來られ指導して下さつた事は吾等の爲に非常な力であつた。

新學期になると新に一年から庭川、梶田吉川、本郷、西川、永田の諸君を迎へる事が出来吾が部は再び力強さを覺へ愈々本當の烈しい鍛鍊に入つた。一撃一突に生命のあらんかぎりなこめて歩一歩光榮の道へと猛進して行つた。

あはたゞしい春と共に花は散り行き麥の萌は出る頃になると引續き先輩からの慰撫激勵の手紙が來た。道場の壁にはりつけられて行く手紙に鞭撻せられ練習は愈々烈しくなつて行つた。四月に多年我が部に奉職し御盡し下さつた宮脇師範淺子助手が引かれてから師の無い吾等は心細い氣もしたけれども尙吾等には燃ゆるが如き意氣がある。一致協力益々自ら勵して奮闘を續けた。終には宮島君を派して九大の先輩に乞ひ西先

輩の御來援を得て練習を引きしめて行つた六月に入ると京都から遙に田中先輩が應援に來られ又臨時に池田四段の來援を得て練習は白熱して行つた。一方高工藥專中等學校警察等に練習試合を申込んで試合の稽古も怠らなかつた。あそこ一ヶ月、三週間、學期試験も近づくさ死物狂の練習の日が續く空を紅にそめて夕陽が金峰の彼方に沈んで行く時濟美館を出て目前に迫つた遠征を思ふさ若き心は躍り血はわき立つ。あゝ時至る。戦はん哉。七月十一日我等十四名は必勝を期して愈々遠征の途についた

監督 米澤忠雄
選手

中島健治、荒木省吾、佐藤潤一、石井龍生、伊藤朝生、石中廣夫、庭川辰雄、植田豊、吉川稔、本郷芳郎、西川忠彦、永田忠。

車窓より遠ざかり行く熊本を眺めた時は感慨無量だつた。さらば熊本よ我等は行かむ我等の新膽一ヶ年を守り呉れと熊本よ今暫く刮目して我等が奮戦を見よ。遠征へ遠征へ。夕方博多驛に着き多くの先輩に迎へられて合宿に落ちつき静養した。次の日は會場たる記念館で先づ場なれに暫く練習、昨

年も此の所で優勝したんだ。今年も勿論であらねばならない。其の日の夕方は九大の歓迎會に行き遠征歌高誦して先づ一堂を壓し揚々として歸宿し靜に就寢した。

明くれば七月十三日午前十時佐高と對陣此處に大正十一年度遠征の事は切つて落された。彼は初陣にして力未知數なるも吾に五高劍道部の意氣あり、一ヶ年の辛苦あり何條あらう。此の時既に師範に内定して居た津崎先生の來援ありて大いに意を強うした

審判

表小泉先生

裏田川先生

佐高

井上

岡村

池上

坂井

末延

最所

水上

大長

島田

若杉

植田

本郷

庭川

石井

吉川

石中

佐藤○

伊藤

荒木

中島

我が先鋒植田先づ立つて氣合一聲忽ちに井上を切つて落す。幸先よしと見る間に續く四人を切靡き五高先鋒五人切りと嘯ばれ最所に譲りたるも彼は今日の主動好漢自重せよ。最所よく戦ひ本郷庭川力戦及ばずも石井戦友に報じ石中水上をほふれば大熱漸く決する所我が闘勝佐藤出づれば巧に三將以下三人を抜き戦勝我が手に歸せり。時に一時半武運やよし凱歌をあげて合宿に歸り休養す。

同日午後三時より長崎高商と對陣

審判

表中野先生

裏津崎先生

五高

石中

永田

西川

石井

植田

吉川

○佐藤

伊藤

荒木

中島

長商

大村

田中

岩津

千田

岩田

宮川

小坂

大川

瀬尾

首藤

長商は一方の雄されど我が軍の前一觸に如かんや先鋒石中元氣旺盛痛快に大村以下五人を撫切し再び先鋒五人を抜け我が軍漸く敵を壓す。石井宮川を倒し大川にゆるし、も植田此に報ずれば佐藤再び副將大將を刺し再び我が軍の勝利となり部歌を高唱して引き上ぐ。時に四時半。今乞二日にわたる二回宛の豫選に多くは倒れて藥專と最後の覇を争ふ事になった。彼は去年も此場で吾と優勝を争つた強の者だ油斷は毫もゆるさない。七月十四日午後三時半彼我對陣すれば殺氣場に満ち見る人息をひそむ。

審判

表中野先生

裏細見先生

五高

植田

西川

庭川

石中

石井

吉川

佐藤

伊藤

○荒木

中島

藥專

高田

松下

田口

中路

山本

小山

尾上

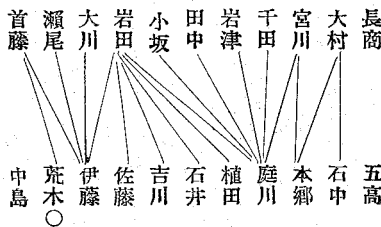
岩野

杉澤

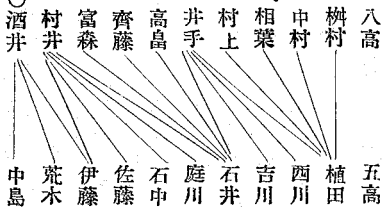
米岡

植田先づ立つて高田を破り松下を切つて引
けげ西川田口中路を斃し山本に譲る。山本
敵ながらよく戦ひ我が中堅奮戦甲斐なく皆
一本一本にて枕を並べて討死す。戦運漸く
非ならんとする所常勝軍佐藤出て奮戦巧に
之をほふり勢に乘じ小山尾上を切れば果然
接戦になり、一進一退副將の對陣となる。
満堂肅ましかたづを呑んで勝負をうかゞ
ふ。荒木やおらに立ては忽にして杉澤を斃
し、大將米岡に向ふ。されど彼は一方の將
彼我相降らず奮戦數時遂に彼を倒す。時に
夕陽赫として場内を照す時大喝采裡に再び
彼の榮ある紫紺の優勝旗は大將中島の手
與へられた。
勝つた／＼先輩の手によりて一旦勝得られ
た。幸先よしさらば行かん京北の地。
其の晩は心ばかりの祝勝會の後校長先輩に
喜報を發して午後八時先輩の熱い激励の言
葉に送られて征歌遙に愈々東征の途に着い
た。

だ。勝報昨夜見た、京都でも是非勝つて呉
れ給へと云はれた時熱い涙がにじんだ。榮
ある歴史を思へば若き命は必勝の意氣に躍
動す。其の日は合宿に旅の疲れを憩ひ次の
日大學道場に行き、場馴をし戦備怠りなく
戦の日を待つ。
七月十七日再び長商と會戦する事になつた
又かこ相互は苦笑した。然し大事の前決し
て心をゆるめてはならない。



で切りす。此の日の主動なり。岩田敵なが
らよく戦ひ、植田石井吉川奮闘せしも及ば
ず佐藤病軀熱高き身進退まかせず破れたれ
ば伊藤奮然として岩田をほふり大川瀬尾を
たほして大將に迫り大勢遂に決し荒木首藤
を破り兩度我が勝利なり勝鬨と共に引き上
ぐ。
七月十八日正午次いで八高と對す。彼は昨
年我に破れたりと雖も一方の雄勝敗俄かに
逆賭すべからず。



先鋒植田先づ立てば忽ち四人を抜き石井輕
快に太刀を振ひ再び四人を切り靡けば我が
軍大いに敵を壓したるも庭川石中佐藤村井

の爲に斃るゝ及び戰運漸く迫れば伊藤奮ひ村井を切り酒井に譲る。荒木奮然立ちて大いに戦ひたるも一本一本にて惜しくも破れ終に大將同志の一騎打となる。中島は三軍の將やゐら太刀を取りて立てば思ひ無量全軍活殺重き任を双肩に荷ひ猛然として戦ふ。然しながら終に戰の神は吾に幸しなかつた。我々は相抱いて泣いた。涼々として南に流るゝ鴨川の畔戰敗の苦き杯に我等は涙の限り泣いた。そして又來年こそ誓つた。來年こそ是非勝つて呉れ、來年こそ必ず勝たねばならぬ。

最後にこんなに拙い私共を熱心に指導應援下さいました、校長部長諸先輩及び京福で懇切に御世話下さつた、青柳、大迫、山縣の諸兄更に絶大の應援下さつた龍南健兒諸に厚く感謝申します。(委員手記)

五高佛敎青年會

事情雜況

文二甲三 清水和彦稿

由來我五高佛敎青年會は永い歴史と廣い活動範圍と充實さを經て來ました。その折

折の消長もありました。又著しい發展もありました。當時の敎授の援助外部からの援助を仰ぎ又外部に對しての傳道運動も記録に残つてゐます。五高佛敎青年會館の建設もありました。名士招聘の演說會もありました。然し其の新舊交代に伴ふ潮流の變化を認められますが、特に此の五六年に於て從來の方針に一新の革命的進展を見ました。即從來宗派的姑息な空氣を一掃し外部との接觸を斷絶し傳道的運動を停止し各自龍南健兒の意氣と熱と相擁して琢磨研鑽を標榜するに至つたのであります。即剛毅を旗幟とする龍南の一國家となつたのであります。當時の衝にあたつた人々には自己辨道の機會を作り外は青年會館の問題を處理し漸時内容の充實を計つたのです。

その當時の人々の意氣は實に男性的でした。我には眞理を求める爲に會合してゐるのであつて俗人と交る餘裕はない。他人へ傳へる何者もないと云ふのでした。此の處に自ら機縁が熟して澤木與道師を見出したのであつた。而來我會員は手を携へて川尻なる大慈寺に到り雲水の中にあつて嚴格な參禪をしてゐた。此の人々について下

村彌一氏草場弘氏等次に古閑潔氏河邊氏大迫尙隆氏相嗣いて我會を幹し、その進展を計られた。下村氏大迫氏等は當時龍南の中心人物であり又龍南の寵兒であつた。その人々の氣息に従ふ我會も又自ら龍南を中心としてゐたものであつて決して一味の人々の私の會合では決してありませんでした。

現在の我會には所謂會員名簿は存在しません。それはその時代の人々を凡て會員としてゐることにもあたります。誰もが眞理を求めること云ふ點に於て一つになつた時處が我會の生命であります。

又來る二月澤木老師の大徹堂に於て涅槃會に因んで一日から十五日まで坐禪がある筈であります。その折に指月禪師の坐禪用心記不能語の堤唱があることになつてゐます。此の本は實に坐禪の機微を徹底的に穿つた此の種類の書の唯一の權威です。而も版は失はれ絶版の不幸に遭つてゐますが幸ひ澤木老師の手元に二部あるので一部拜借して謄寫して五十部だけ製本しました。

指月禪師は暮末に勃興せんとした日本佛敎界に嶄然頭角を現はした曹洞宗の高僧で